

# タガ 日本の箍の緩みの考察

金沢工業大学客員教授

(株)人間と科学の研究所 所長 飛岡 健

## 日本文化とその基底を考える上での基礎知識(Ⅰ)

### はじめに

最近その人数が大きく増加すると共に、様々な国やレベルの人が来日している。そうしたインバウンドの観光客から、日本人は、本シリーズ(1)~(5)で描いた日本文化の優れた価値を、逆に教わっている。そうした多くの外国人の来日する状況に、ノンビリ屋の日本人も目を醒まし始め、徐々に日本人自身が日本についての知識を深める努力をし始めた。それをどのように行えば効果的なものか？

既に指摘してきたように、その気になれば、沢山の日本(人)研究がなされ、論文や出版物として供されている。それらは少なくとも日本(人)についての現象面や表面的特色に関してはかなり詳細に描き出している。その気になればかなりそれから学ぶ事が出来る。しかし、大きな問題が残されている。その問題とは日本(人)論の底流にあるもの、それをここでは基底と読んでいるが、

それに関しては研究があるものの、それだけでは十分ではなく、特に日本歴史の中でどのように、そうした文化とその基底が形成されたのであろうか。その点に関しての掘り下げは不十分である。その指摘に基づき本シリーズ(6)では、定着型の水田稲作農業によって日本文化の重要な部分が形成された事を述べてきた。その作業は、それなりの説明力のある答えが出せたと考えている。

しかし、その作業をより理解するには、更にそれらのベースとなる人間存在そのものの生存環境との戦いの議論がよりしつかりとなされている事が必要不可欠である。これまで、その点を自明のものとして日本文化とその基底に関しての形成のプロセスを論じてきた。そこでその点を捕捉する為の作業を本稿で行っていく。その為に論じる内容は以下の如くである。

1、人間の心身の構造(生理―心理―精理(精神))の三位一体の階層構造と機能

2、環境適応進化論…人間は社会的動物(ポリス的)アリストレス

3、考える葦(ホモ・サピエンス)…言葉操る生物(認識の発達)、文明、文化の誕生

4、工作人間(ホモ・ファール)と文明

5、悩める存在としての遊人(ホモ・ルーデンス)と文化

6、水の惑星としての地球という星の理解

7、o.g.(人間は、人種として存続)これらの点に関しての深い認識の上に、人間の営為としての文明、文化を考察せねばならない。

①人間の心身の構造と機能―生理、心理、精理(精神)の三位一体の階層構造―

何よりも人間の能力を論じる時に、人間の心身は、環境の淘汰圧と自ら考える目標に対して、"変化機能"を内包している点を強く強調しておきたい。そして個々の人間

の変化を通して、種としての変化を取込み適応していくメカニズムを有している事を把握しておかねばならない。②で述べる環境適応が生じ得る背景には、この機能が存在しているから可能となるのである。まさにダーウィンの語った如く、強いものが残るのではなく、残ったものが強いのである。残る為には変化し、環境の淘汰圧と、自らの精神が定立した目標の実現に向けて適応出来る。

さてその人間の身体は構造的には

図1、機能的には図2で示されている如くであり、それらは生理—心理—精神(精理)の三位一体の重層階層構造として構成されている。その三位一体として変化に対応しているのである。この中で生理(Physiology)と心理(Psychology)とは明確に学問的に定義されているが、精神に関しては、「理」が入っていない。精神病理学(Psychopathology)という学問はあるが、生理、心理レベルが概念化が進んでいない。私は精理

という造語を用いる事になっているが、まだ認知を受けていない。ここでは人間の心身の詳細のシステム(メカニズム・オブ・ファンクショニング)に関して描く事が目的では無く、一人ひとりの人間は、人類として、百数十万年の時間の中で、巧みに環境に適応する事によって、60兆個に達する細胞を巧みに構造化し、それらに機能を与え、生存している生き物であり、未だ一定程度の変化をし続けている。そして約100年以

内の中で、誕生—成長—成熟—衰退(病氣)—死亡のプロセスを辿り、「生老病死」の苦悩と格闘する生き物である。

## ② 環境適応論と主体的環境改造論

### <五体による分類>

頭 部：頭部  
胴 体：背 胸 腹 腰  
四 肢：腕 脚  
上 肢：頭部 背 胸 腹 腕  
下 肢：腰 脚

### <器官上の分類>

運動器：骨 軟骨 骨格筋 靱帯  
感覚器：目 耳 鼻 舌 皮膚 粘膜 筋紡錘  
呼吸器：口 鼻 喉頭 咽頭  
循環器：心臓 脾臓 骨髓 血液  
消化器：口 喉頭 食道 胃 小腸 大腸 肛門  
消火腺  
神経系：中枢神経 末梢神経 etc.  
生殖器官：乳房 卵巢 子宮 etc.  
内分泌器：視床下部 下垂体 松果体 甲状腺  
副甲状腺 副腎 卵巢 胎盤 精巢

図1 人体の構造

### <人体の機能>

代謝：体内の化学反応、巨大分子を小分子に小分子を巨大分子に  
反応：体内や体外の環境の変化に対する対応  
様々な器官を働かせ、ホメオスタシスを安定させる為の仕組み  
運動：臓器(胃、心臓、等)や身体(骨、筋)の動き  
増殖：増加(細胞の大きさ、数、細胞周りの物質の数)  
成長  
発生：特徴を持たない細胞から、特徴を持つ細胞へ分化  
生殖：遺伝によって新しい個体を作る

図2 人体の機能

ダーウィンの適者生存の進化論を始め、今西錦司氏『棲み分けの理論』等様々な生命の進化、発展に関する議論はあるが、私は少なくとも人類という生命体は、高度な言語機能を獲得する事によって、自らの与えられた環境の淘汰圧に対し、一つは環境そのものをホモ・ファールとして文明の利器(道具)を用いて、改造する事によって、生き易くし、同時に自らの心身の即ち生理—心理—精神を変化せしめる事によって、環境に適応する(Acclimatization)能力を培ってきた生きものと捉えている。いや先天的にそうした能力を宿されているとも言えるであろう。

例えば太陽の光の強いところに、棲息する民族は、肌や目が黒くなり、高緯度の寒冷地に生息する民族は、体の熱量を大きくする為に、基礎体温が高く、身体が大きくなって

いった。日本人は中緯度の温帯モン  
スーン地帯で、水田稲作農業を生活  
の糧を生み出す業としていたので、  
肌は黄ばみ、目は黒くなつたし、体  
の大きさは中程度の大ききで、上半  
身が農耕作業の為に大きくなつたの  
であつた。結果として5頭身以下が  
多い民族であつた。

そうした各々の民族が、各々の棲  
息の地としての自然環境の淘汰圧に  
対して、自然と自らの心身の改造に  
よつて、より良い生存の場を獲得し  
てきたことが、人類の歴史であり、  
民族の歴史であつたし、それは各々  
の民族の文明、文化の発展の姿その  
ものである。この視点を人類の営為  
の様々な姿を理解する「根本原理」  
である事を了解しておく事が必要  
不可欠である。

もち論、進化(Entwicklung)と  
いう言葉よりも、展開(Entfaltung)  
という言葉の方が、歴史の理解に必  
要という議論も一部の学者の間には  
あるが、私は一定程度の進化、発達  
という言葉を用いた方が正しい記述  
が科学的には出来るであらうと捉え  
ている。

その為には人体の生理的メカニズ

ムとして、この宇宙のあらゆる自然  
現象が用いられている。

例えば、心臓血管システムの循環  
系一つとっても、十数kmの長さで、秒  
速数十cmの速度で数十ミクロンの毛  
細血管にまで血流を行きわたらせる  
為に、実に多くの自然現象が取り入  
れられ、まさに「宇宙の神秘」とも  
言わねばならぬ位の高度の機能が高  
度に調和的に組み立てられている。

脳システムにしても同様であり、  
まさに「調和の霊感」とも言うべき  
絶妙の仕組みが百数十億個の脳細  
胞を中心に出来上がっている。知れ  
ば知る程その神秘さに驚嘆させられ



るのである。

改めて人間は、生理—心理—精理  
(精神)の三位一体の重層階層構造  
体として出来ており、環境に三位一  
体として適応すると共に、自らの心  
身を変えていく存在である。

従つて、一つの民族や人種を取り  
上げて、その特定を論じる時には、  
その民族や人種の生理—心理—精  
理をしつかりと、環境との関係にお  
いて把握する事が重要である。結果  
的にはそれらが各々の民族、人種の  
文明、文化の形成と深く結びつくの  
である。

更に次の点が重要である。人類は  
当初与えられた環境の淘汰圧によつ  
て規定され、それに適応する努力を  
し、環境そのものと自身の心身の改  
造を行うが、一人ひとりの人間は自  
己の中に主体性を定立し、新しく目  
標を定め、それを実現するべく、こ  
れまた環境の改良、あるいは人工的  
環境の創造と、自らの心身の改造を  
成していく存在であるとの認識を強  
く持つ事である。人類は受身的に環  
境変化するのみでなく、能動的に環  
境操作をしていく存在でもあり、時  
として『聖書』のバベルの塔の話の

ように行き過ぎな事がある。ある意  
味で今日の地球上の姿がそうなりつ  
つあるのではなからうか？

### ③考える章(ホモ・サピエンス) —言葉を操る生き物—

人類と他の生命体との大きな違  
いは、人類がホモ・サピエンスとし  
て「考える力」を高度に宿している事  
である。もち論、他の生命体には環  
境との対話をする為のコミュニケーション  
力としての言葉の十分な発達  
はないものの、まずは五官の発達と  
原初的な言葉とそれを組み合わせ  
る知性とは観察されている。人類と  
して比肩し得るレベルには遥かに達  
していない。それ故に人類が地球上  
に良くも悪しきも君臨している。

何よりも、アフリカで誕生した  
(百数十万年前)とされる人類は、  
アフリカの草原での生活の必要性か  
ら二本足歩行(Bipedalism)をし、  
前肢を自由にし、手としての発達を  
遂げ、その動きを高度化すると共に、  
脳(Cerebrum)を発達させ、  
ある瞬間に「ある物とある物とを分  
離識別する能力」(哲学辞典)とし  
ての悟性(ロゴス=Logos)を獲得

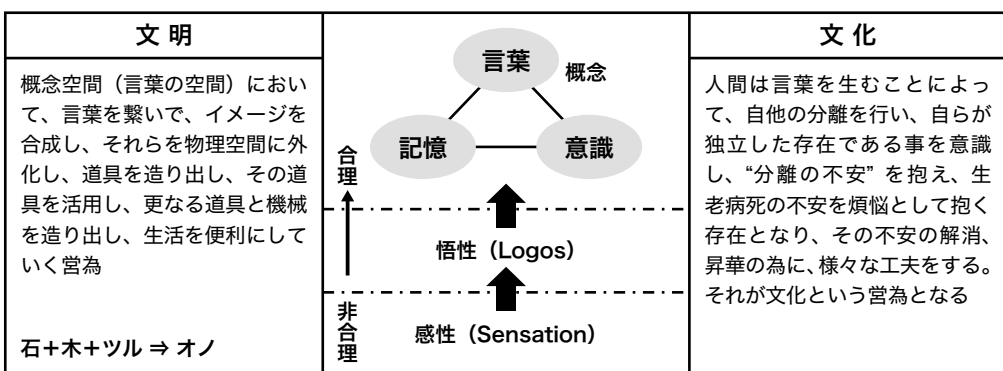


図3 文明と文化

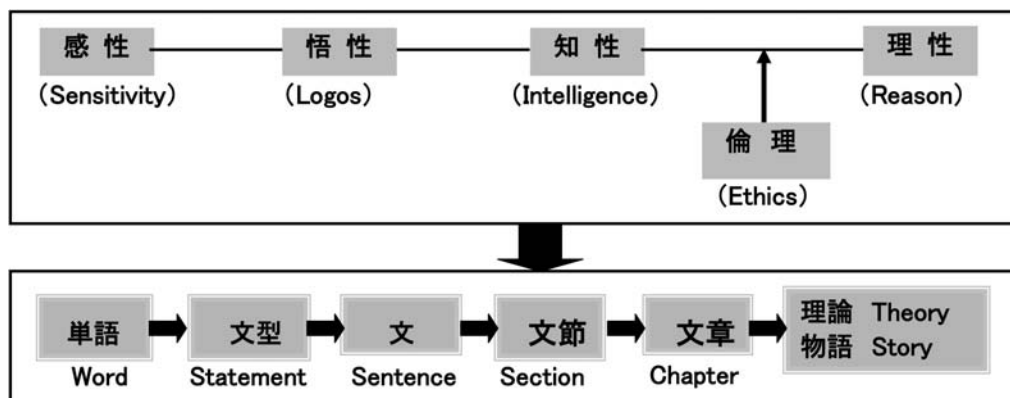


図4 感性から理性へ

した。その瞬間は、それが成立する為に、記憶 (Memory) とそれを脳裡に浮かび上がらせる能力としての

意識 (Consciousness) とを同時に獲得したものと考えられる。記憶がなくとも、意識がなくとも、人間の

脳裡の中で言葉の機能は発揮されなからである。

しかし、別々に論じる方も多い。

それは斉合性がとれなくなるので、私は三者の三位一体としての発生と捉えるべきであらうと考えている。そしてその瞬間から、相補的關係にある文明と文化とを生み落としていく事になる。その定義は、図中の両側になされている。今日、この文明、文化の定義が論者の間で確立していないところに課題が残っている。

そして人間は、単語を組み合わせる能力 (知性) を獲得し、更に社会的動物 (zoon politikon) として、調和の為に倫理 (Ethics) という価値を生み、それを知性に適用する事で、理性 (Reason) という能力を発達させ社会的秩序 (Social order) を保っている。そうして作られている社会は調和的であり、Cosmos (反対語は chaos) と呼ばれる。

図5 歴史年表

そうした人間の造語能力としての悟性、組み合わせ能力としての知性、更に社会的調和を図る価値観としての倫理と、それを知性に加えた理性とを用いて人間は、図3に示したように文明と文化とを相補的に生み出し展開してきた。既に指摘してきた如く、この文明、文化の定義は論者によってマチマチであると共に、曖昧なまま使用しているケースが多く、混乱を招き易い。一つの参考事例は、『歴史年表』の大部分類として文明、文化が用いられている。即ち、図5の如く、文化は更に思想、宗教、芸術に分類されている。

(次号へ続く)